

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	「在宅医療における学生教育」 - 埼玉県 4 大学連携 I P W 実習支援の経験 -
演者名	大和康彦 1) 中井秀一 1) 市川聡子 1) 阿部直 2) 中根晴幸 1)
所属	1)ハーモニークリニック 2)デュエット内科クリニック

目的：ハーモニークリニック（さいたま市緑区）は、内科系外来診療および医療連携を基盤とした在宅医療を平成 7 年の設立以来実践している。更に地域医療における I P W（専門職連携）実践の場として、埼玉県内外の複数の大学、研修指定病院、看護学校などから研修生を受け入れてきた。近年、医療機関や教育機関においては I P W と I P E（専門職連携教育）の重要性が注目されているが、教育機関では養成対象職種の専門教育に従来特化してきたために、学生はその職種の視点に縛られる傾向にあった。平成 25 年度に埼玉県内における医学科・看護学科・医療栄養学科・生活環境デザイン学科という様々な大学生によるチーム学習モデル事業として、埼玉県 4 大学連携 I P W 実習（彩の国連携力育成プロジェクト）が企画実践され、施設ファシリテーターとして当院とその医療チームが「在宅医療における学生教育」に関わる貴重な経験を得たので報告する。

実践内容：今回の実習では、在宅療養中の 70 歳台男性患者を担当症例とし、4 大学の学科生 5 名と指導教員 3 名とで 4 日間の I P E を進行した。施設ファシリテーターとしての役割は、事前の指導教員との打合わせ、患者家族への説明と同意確認、患者情報提供、I P W 情報提供、I P W の実態を見学する調整、学生のディスカッションやリフレクションへの支援であった。

実践効果：学習者には、援助を必要とする人々・保健医療福祉に携わる人々と直接関わることにより、①利用者・集団・地域の理解と課題解決、②多領域の相互理解、③チーム形成、など様々なプロセスを体験し、地域の保健医療福祉の場における連携と協働を実践的に学ぶ研修であった。

考察：多職種が関わる在宅医療という環境は、まさに I P E の場として最適といえる。学習者が日々成長していくプロセスを見つめることで、私達が日常実践している I P W を振り返ると共に、問題点や改善点も明らかになってきたので考察する。